

【研究ノート】

## フランツ・カフカ『変身』の「虫」の変態についての一考察

富山典彦

フランツ・カフカの『変身』は、あまりにもよく知られていて、今さら筆者が40年近い歳月<sup>1)</sup>を経て、この作品について何かを述べる資格などないかもしれない。しかし、卒論指導をこの20年あまりやってきて、毎年とまでは言わないけれど、何人ものゼミ生が『変身』をテーマにして卒業していったことは事実である。それどころか、大学教員になる前にアルバイトで塾の国語の講師をしていたとき、この作品で感想文を書いた生徒も少なくない。筆者自身も、恥ずかしいことながら、高校卒業のときに、この作品の真似をして、表題はもう忘れてしまったが、徐々に石に「変身」していく生徒の話を書いたことがある。

卒論指導では例えば、主人公のグレーゴル・ザムザは虫になど変身したわけではなく、それまで家族のために、朝早くに起きて汽車に乗って営業活動することに疲れ果て、自分の部屋に引き籠もってしまった、というふうに論じたものもあった。人間が虫になるという、生物学的にも現実的にも考えられない事態を、たしかにこの解釈はうまく説明している。しかし、この作品のあちこちに書かれていることを、この解釈ですべて解決するわけではない。

あるいは、副題に「女性たちの変身」と付けたものがあって、グレーゴルの「変身」を機に、女性たち、すなわち妹と母とそれに、家政婦たちがどのように変化したかを論じたものもあった。たしかに、妹のグレーテの成長ぶりが著しいのはすぐ目につくが、ほとんど脇役でしかない家政婦が3人登場し、とくに3人目はグレーゴルを恐れることなく、その死骸の処理をしている。卒業論文としてはこの目の付け所を評価していいだろう。

ただし、父親こそ、一家を支えていた息子が仕事を失ってしまったために、それまで廢人同然だったのが、制服を着て仕事に出かけるように

なり、危害を加えるつもりがなかった息子グレーゴルにリングを投げつけて追い払い、なにかにつけて横柄な3人の間借り人たちに対して毅然たる態度で契約解除を宣言しているから、父親こそ著しい「変身」を遂げている。

そう考えると、グレーゴルの変身をきっかけにして、家政婦も含めた家族全員の「変身」を、この作品から読み取ることも可能かもしれない。とはいえ、カフカの作品とこれまで何かにつけて関わってきて思うことは、読者にさまざまな解釈を許容しているかのように見えるのとは対照的に、結局何一つ、正しい解釈など存在していないことを見せつけられるのが、カフカの作品の特徴であるように思われる。

さて、今年度もまた『変身』を扱った卒業論文を指導し、その審査をした。今回は、グレーゴルが変身した「虫」の大きさとその形状に注目したものであった。もっとも、「虫」の大きさについてはすでに先行論文があり、学生もそれを忘れずに取り上げている。便利な時代になったもので、筆者が卒業論文を書いていた頃には、ある先生から「君たちはドイツ語の論文はよく参照したり引用したりしているが、日本語のものはほとんど利用していないね」などと言われたものだが、本として出版されているものは、図書館や神田の古本屋である程度手にすることができたが、いわゆる紀要論文となると、手に入れることはもちろん、その存在を確かめることさえ不可能に近かった。まれに誰かの伝手で、少しは名の知られていたカフカ研究者の紀要論文を目にしたこともあるが、ドイツで出版された著書を手に入れる労に比べたら、紀要論文を探索する労は、労多くして……という次第であった。

しかし今や予想もしなかったネット社会、検索すれば何かがヒットし、それをpdfファイルでダウンロードすることができる。ということで、「虫」の大きさに注目したその紀要論文では、「虫の大きさと主人公の家族や社会とのつながりの大きさが反比例する」という意味のことが書いてある。指導していた学生から、当該論文を見せてもらい、一緒に考えたところ、主人公が虫になった時点で、もう社会とのつながりは切れているし、逆に、それまでほとんど家族とともに時間を過ごすことになかった主人公が、「虫」になることで、家族の暮らしぶりを実際に聞き知ることができるようになったのではないか。だから、単純に反比例と

言ってしまうことはできないと、学生もただちに納得する。

たしかに、変身した直後は、ほぼ人間の大きさであったろう「虫」は、最後には干からびて、3人目の家政婦の箒で掃いて捨てられる程度に小さくなっている。形状も、ベッドの上に仰向けに横たわっている「虫」は、昆虫というよりはダンゴムシのように、固い背中に幾重にも盛り上がった腹と何本もの短い足、という姿である。しかし、最後は、家政婦にクソコガネ *Mistkäfer* と呼ばれているから、これはどうやら昆虫、しかもコガネムシのような甲虫の姿をしていたのではないか。

この学生が、ここからどういう結論を導き出したかはともかくとして、卒論面接のときに、このあたりを問題にして質問していたら、突然、ある思いつきが筆者の脳裏をよぎった。そこで、忘れないうちに、もう一度『変身』を読み返してみ、この思いつきを確かめてみようと考えた。

カフカの作品は、読むたびに何か新たな発見がある。今年卒論を書いた学生も、何度かカフカの原典を読んだそうだが、やはり筆者と同じ感想をもったようだ。読むたびに新たな発見があるとすれば、いったい何を自分の論文に取り入れたらいいのか。何か一つを取り上げて論文を書いてみたところで、そこに書き切れなかったいくつもの「発見」が残ってしまう。もっとも、これらの「発見」はたいてい、別の誰かにすでに「発見」されているのだが。

さて、筆者が思いついたことというのは、グレーゴルが変身した「虫」が、クモヤムカデやダンゴムシなどではなく、コガネムシの一種であるとしたら、幼虫と成虫とのあいだに「変態」が起こらなくてはならないことである。筆者が幼い頃慣れ親しんだ『昆虫図鑑』で、その変態のことも詳しく書かれてあったのを覚えている。チョウやガのような鱗翅目は、卵から幼虫、そして蛹から成虫に「変態」するし、幼虫も、卵から孵化したばかりのものと、それが脱皮したものとでは見かけが違ってはいるし、蛹になるまでに幼虫は何度か脱皮を繰り返す。

甲虫類も、鱗翅目ほどには数多くの変態を繰り返すことはないが、幼虫と成虫とではずいぶん形が違っている。この作品の初版を出版するとき、グレーゴルが変身した姿を書かないでほしいというカフカの希望により、初版の表紙には、半開きになったドアの前で、手で顔を隠しつつ、そのドアの隙間に背を向けて立っている男の姿が描かれている。扉の向

こうには、何かものすごいものがある、ということを読者に知らせてはいるが、それがどんなものなのか、カフカ自身の意図にしたがってこの絵からはまったくわからない。

作品を読み返してみると、基本的には語り手は、グレーゴルの目を通して見えている世界を描いている。カフカ初期の短編である『変身』では、語り手と主人公との視野の一致はまだそれほど徹底していないが、かつてマルティン・ヴァルザーが指摘した<sup>2)</sup>ように、語り手が主人公の知り得た以上のことを知り得ないために、「カフカの」と称される独特の作品世界が成立するのである。

だから、グレーゴルが変身した巨大な「虫」が、実際にどんな姿をしていたのかについては、ほとんど記述がない。ほとんど断片的なこれらの記述をたどることで、この「虫」がいつ幼虫から成虫に変態したのかについて、考えてみることにしよう。なお、この作品はクルト・ヴォルフ書店から「最後の審判の日」シリーズの22/23合併号という形で、1916年に出版されているが、その前年に印刷されたものがファクシミリ版で出ている<sup>3)</sup>ので、これを使うことにする。なお、グレーゴルの変身したのが甲虫類の幼虫であるとして、それがいつどのような状況で変態して成虫になったのかをたどるために、できるかぎり原文そのものを引用し、その日本語訳は最低限にとどめたい。

さて、『変身』のあの有名な冒頭である。

Als Gregor Samsa eines Morgens aus unruhigen Träumen erwachte, fand er sich in seinem Bett zu einem ungeheuren Ungeziefer verwandelt. Er lag auf seinem panzerartig harten Rücken und sah, wenn er den Kopf ein wenig hob, seinen gewölbten, braunen, von bogenförmigen Versteifungen geteilten Bauch, auf dessen Höhe sich die Bettdecke, zum gänzlichen Niedergleiten bereit, kaum noch erhalten konnte. Seine vielen, im Vergleich zu seinem sonstigen Umfang kläglich dünne Beine flimmerten ihm hilflos vor den Augen. (S.3)

最初の文でまず気付くことは、un- という接頭辞が多用されていることである。unruhig (安らかでない) 夢からある朝目覚めたら、自分が

ベッドの中で ungeheuer (巨大な) Ungeziefer (害虫) に変身しているのを見つけた、というのである。語り手は、この重要な冒頭部で、主人公の目を通してしか、主人公の変身を語っていないから、この Ungeziefer がいったいどんな姿をしているのか、主人公の目の届く範囲でしかその姿は描かれない。

この冒頭部分には、「甲冑のように堅い背中」、「膨らんだ褐色の、弓形の塊に分けられた腹」、さらに「たくさんの細い脚」とあるが、ここからいったい、どんなものを想像すればいいのだろうか。ちなみに、英語訳では、

As Gregor Samsa awoke one morning from uneasy dreams he found himself transformed in his bed into a gigantic insect. He was lying on his hard, as it were armour-plated, back and when he lifted his head a little he could see his dome-like brown belly divided into stiff arched segments on top of which the bed-quilt could hardly keep in position and was about to slide off completely. His numerous legs, which were pitifully thin compared to the rest of his bulk, waved helplessly before his eyes.<sup>4)</sup>

とある。正体不明の Ungeziefer をこの英訳者は、はっきりと insect (昆虫) として理解している。たまたま手元に、エドワード・ゴリーの『蟲の神』と『むしのほん』という絵本<sup>5)</sup>がある。日本語の翻訳者は、「蟲」と「むし」と訳し分けているが、前者が insect であり、後者は bug である。絵本に描かれた絵からすると、insect はバッタのような昆虫であり、bug は小さなコガネムシかゾウムシのような「ムシ」である。日本語の「虫」ないし「ムシ」も、昆虫だけではなくクモやミミズやゲジゲジのようなものまでを含むが、bug はまさにそのような「ムシ」の総称として理解していいだろう。

話が少し錯綜してしまったが、グレーゴルの目には自分の腹しか見えていない。背中ではベッドと接しているので、その有様を感じている。しかし、その「虫」の姿の全体は、当然のことながら語り手は記述しない。

グレーゴルが変身した「虫」の姿の全体的イメージは詳らかではないが、ベッドの上に腹を上にして横たわった状態をいつまでも続けている

わけにはいかない。そこでこの「虫」は起き上がろうとするのだが、それがなかなか思うようにいかない。例えば、蝶や蛾の幼虫ならば、体をぐるっと丸めることで、たやすく脚を下にすることができる。だから、次の記述を見るかぎり、この「虫」は蝶や蛾の幼虫ではない。

Zuerst wollte er mit dem unteren Teil seines Körpers aus dem Bett hinauskommen, aber dieser untere Teil, den er übrigens noch nicht gesehen hatte und von dem er sich auch keine rechte Vorstellung machen konnte, erwies sich als zu schwer beweglich, es ging so langsam, und als er schließlich, fast wild geworden, mit gesammelter Kraft, ohne Rücksicht sich vorwärtsstieß, hatte er die Richtung falsch gewählt, schlug an den unteren Bettpfosten heftig an, und der brennende Schmerz, den er empfand, belehrte ihn, daß gerade der untere Teil seines Körpers augenblicklich vielleicht der empfindlichste war. (S.8)

体を回すことが不可能なら、ベッドから転げ落ちればいい。甲冑のような固い背中だとすれば、問題はないはずだ。

Der Rücken schien hart zu sein, dem würde wohl bei dem Fall auf den Teppich nichts geschehen. (S.10)

しかし、「床の絨毯に落ちたときにたぶん何も起こらないほどに、背中は固いように思われた」という記述において、その「何も起こらない」が接続法第2式 würde で書かれている。接続法第2式は、現実とは関わりのない話者の想像や陳述内容を示す語法だから、実際にはそれほど固いものでなかったことが推測される。これに続いて、auch war der Rücken elastischer, als Gregor gedacht hatte (S.11)「グレーゴルが考えていたより背中は柔らかかった」と書かれてあるから、グレーゴルの「虫」はダンゴムシでもないことがはっきりする。こういうふう語り手の曖昧な語りをたどることで、グレーゴルは甲虫類の幼虫になっていると考えるのが妥当だろう。

以前、カブトムシやクワガタムシの幼虫を飼育することが流行したが、

これらの幼虫は地中に生息しているから、グレーゴルのような状態になったら、体を元に戻すのがどれほど困難か、容易に想像できる。背中も、ムカデやダンゴムシのような固いものではないことは明らかだ。

しかし、意を決してベッドから転げ落ちたグレーゴルは、なんとか脚を床につけて、床のうえを這うことができるようになる。次の記述によると、この「虫」は前にしか進むことができず、方向転換ができないのである。

Nun hatte aber Gregor noch gar keine Übung im Rückwärtsgehen, es ging wirklich sehr langsam. (S.24)

自分の部屋から外に出ることがかなわず、もとの場所に戻ろうとして、方向転換のできないこの「虫」は、どうにか後ずさりしている。そして、自分の部屋に戻って、絨毯の下に身を隠し、ともかくそこで一日を終えることになる。

以上が、この短編小説の第一章だが、続く第二章では、翌朝の食事の場面が提示される。

Erst bei der Tür merkte er, was ihn dorthin eigentlich gelocht hatte, es war der Geruch von etwas Eßbarem gewesen. Denn dort stand ein Napf mit süßer Milch gefüllt, in der kleine Schnitten von Weißbrot schwammen. (S.26)

家族にとって、この「虫」はまだグレーゴルだと認識されていて、まずは、グレーゴルの好物がドアのところに置かれている。ミルクに浸された小さく切った白パンという、とてもご馳走とは言えない食べ物だが、忙しく仕事で駆け回っているグレーゴルにとっては、それが好物だというのが、グレーゴルと接する機会の乏しい家族の認識なのである。しかし、それに一口つけたとき、もはやそれは「虫」の食べられるものではなくなくなっていることがわかる。

形がなんであれ、生き物である以上、何か食べなくては生きていけない。そこで妹は、蛆虫にも見えるグレーゴルのために、何が食べられる

のかを試すためにありとあらゆるものを運んでくる。

Niemals aber hätte er erraten können, was die Schwester in ihrer Güte wirklich tat. Sie brachte ihm, um seinen Geschmack zu prüfen, eine ganze Auswahl, alles auf einer alten Zeitung ausgebreitet. Da war altes halbverfaultes Gemüse, Knochen von Nachtmahl her, die von festgewordener weißer Sauce umgeben waren, ein paar Rosinen und Mandeln, ein Käse, den Gregor vor zwei Tagen für ungenießbar erklärt hatte, ein trockenes Brot, ein mit Butter beschmiertes Brot und ein mit Butter beschmiertes und gesalzenes Brot. (S.29)

腐りかけた野菜、食べ残しの骨、木の実、チーズ、乾いたパン、バターをついたパン、バターと塩をついたパンなど、要するに、グレーゴルのためにこしらえたものではなく、食べ残しや食べられなくなったもの、つまりゴミのようなものを部屋に運び入れたのである。グレーゴルがもしも蛆虫、つまり蠅の幼虫になっていたのなら、これらはその蛆虫の食べ物になっていたかもしれないが、巨大な蛆虫に見えたとしても、甲虫類の幼虫は蛆虫ではない。

こうして一ヶ月が過ぎ、グレーゴルの部屋から、不要になった家具が運び出され、幼虫が這い回るのに適した環境が作られていく。「kriechen (這う) 際にあちこちに Klebstoff (粘液) の Spuren (跡) を残した」(S.39) とあるから、グレーゴルはまだ成虫にはなっていない。甲虫類の幼虫と断定してよい証拠が、これでほぼ揃った。

二ヶ月後には、さらに「這うためのたくさんの空間」(S.45) が生まれ、そして、グレーゴルの変わり果てた姿を見た妹は、「まあ、グレーゴル」(S.45) と声を上げる。なんとそれが、グレーゴルの変身後、妹がグレーゴルにかけた最初の言葉だったというのである。

そして、それまでほとんど廃人同然だった父親が仕事を始め、その仕事の制服を着ている姿 (S.47) が語られる。この時点で父親は、その古い殻を脱ぎ捨てて、その「変態」を成功させたということになる。なお、ドイツ人の、オーストリア人も含めたドイツ人の制服への執着は、ムルナウ監督の『最後の人』(1924年)を挙げるまでもないだろう。家に帰ってもこの制服を脱ごうとしない父親は、変身してしまったグレーゴ



ルに代わって、この家の主人、まさに Hausvater<sup>6)</sup> の地位を取り戻したのである。

グレーゴルが甲虫類の幼虫に変身したあと、いったいどの時点で成虫に変態したのかということ、作品から読み取ろうというのがこの拙稿の趣旨だが、今のところまだ、その手がかりが見つからない。父親が「制服の人」として変態を遂げたというのであれば、グレーゴルもこのあたりで幼虫から成虫に変態していてもよさそうのだが、その証拠は見つからない。

次に、母親が「虫」に変身してしまっている息子に一目会おうとするのだが、それを阻止するために、父親はグレーゴルにリンゴを投げつける (S.48) が、そのうちの一つが背中にめり込んでしまう。目覚めたときには「甲冑のような」と感じていた背中だったが、そのあと、意外に柔らかいことを思い知らされているから、リンゴがめり込むのも理解できる。こうして、この作品はいよいよ第三章、最終章へと進んでいく。

グレーゴルは、このリンゴから受けた傷に、さらに一ヶ月以上も苦しむことになるが、同時にその動きも鈍くなる (S.50) とある。ということは、それまで、家具を取りのけられた部屋のなかを、かなりのスピードで這い回っていたということになろう。動きが鈍くなった原因として、背中中のリンゴが腐敗し、それがグレーゴルの生命力を奪ったと考えるのが普通だろうが、しかし、このとき、いよいよ幼虫から成虫への変態が始まったとは考えられないだろうか。

そして、この時点で、これまでこの家族の世話をしてきた家政婦から、二人目の家政婦 (S.52) に代わっている。それはつまり、母親と妹とが、まさに Hausfrau へと「変身」したことを意味する。そもそも、家庭に2人の女性がいながら、そしてグレーゴルの稼ぎにかかっていた家計なのに、どうして家政婦にすべてを任せる余裕があったのか、今さらながら不思議である。3人の家政婦のうち、この2人目の影が薄いのは、この家の2人の女性がいよいよ Hausfrau に目覚めたということの証拠と言えよう。

Und die Wunde im Rücken fing Gregor wie neu zu schmerzen an,  
wenn Mutter und Schwester, nachdem sie den Vater zu Bett

gebracht hatten, nun zurückkehrten, die Arbeit liegen ließen, nahe zusammenrückten, schon Wange an Wange saßen, wenn jetzt die Mutter, auf Gregors Zimmer zeigend, sagte: »Mach' dort die Tür zu, Grete,« und wenn nun Gregor wieder im Dunkel war, während nebenan die Frauen ihre Tränen vermischten oder gar tränenlos den Tisch anstarrten. (S.53)

このあたりを読むと、父親を寝かしつけたあと、この2人の Hausfrau たちが自分たちの「仕事」に目覚め、グレーゴルをただ邪魔者としてしか見ようとしないうことで、グレーゴルの背中の傷がまた新たに痛んでいる様子がわかる。そして、グレーゴルの、眠れない夜を過ごすのである。どうやら、このあたりが、グレーゴルの変態を表しているのではないかと思われる。

グレーゴルの姿は、語り手によって語られることがほとんどなく、本人も、たいていは絨毯の下に身を隠して、家族にも自分の姿を見せないようにしている。今、この闇のなかで、グレーゴルのはいよいよ幼虫から成虫に変態したのではないだろうか。幼虫から甲虫になる直前、甲虫の甲冑のような固い背中になる前に、幼虫のときよりもさらに柔らかい背中になるから、背中のリングはより深く背中にめり込んでしまうのだ。

父親も母親もそして妹もすべてその本来の姿に「変身」したとき、グレーゴルも幼虫から成虫に変態したと考えてもよさそうだ。そして、3人目の家政婦が現れる。

Diese alte Witwe, die in ihrem langen Leben mit Hilfe ihres starken Knochenbaues das Ärgste überstanden haben mochte, hatte keinen eigentlichen Abscheu vor Gregor. (S.55)

この家政婦は、「虫」の姿をしたグレーゴルをまったく恐れる様子がない。ということは、グレーゴルの姿をその目で確かに見届けているということである。

Anfangs rief sie ihn auch zu sich herbei, mit Worten, die sie

wahrscheinlich für freundlich hielt, wie »Komm mal herüber, alter Mistkäfer!« oder »Seht mal den alten Mistkäfer!« (S.55)

このように、グレーゴルを Mistkäfer と呼んでいるから、グレーゴル はもはや、蛆虫のような姿をした幼虫ではなく、成虫である甲虫になっていると理解していいだろう。ただ、ここの alt という形容詞が、なんと 2 カ所の Mistkäfer につけられているのは、どうしてだろうか。本稿での推論によれば、グレーゴルが成虫になったのはそれほど以前のことでなく、とうてい alt などとは言えない。いや、最初から甲虫の姿に変身していたとしても、それからまだほんの数ヶ月が過ぎただけだから、とうてい alt といえる時間など経過していない。

この alt は、成虫になったとき、昆虫はもうそれ以上変態することはないから、これが最後の姿であり、その意味では、「年老いた」と言っ ていいだろう。蟬も成虫になってほんの数日しか生きることはなく、蜉蝣にいたっては、成虫になってすぐに死んでしまうから儂いものの比喩にも用いられるが、卵から幼虫の時代も含めて考えると、寿命全体はそれほど短いものではない。成虫こそは、その昆虫の死ぬ直前の姿ということであり、その意味では、alt という形容詞がついても不思議ではない。グレーゴルにもまた、死が迫りつつあった。

Einmal am frühen Morgen -- ein heftiger Regen, vielleicht schon ein Zeichen des kommenden Frühjahrs, schlug an die Scheiben -- war Gregor, als die Bedienerin mit ihren Redensarten wieder begann, derartig erbittert, daß er, wie zum Angriff, allerdings langsam und hinfällig, sich gegen sie wendete. Die Bedienerin aber, statt sich zu fürchten, hob bloß einen in der Nähe der Tür befindlichen Stuhl hoch empor, und wie sie mit groß geöffnetem Munde dastand, war ihre Absicht klar, den Mund erst zu schließen, wenn der Sessel in ihrer Hand auf Gregors Rücken niederschlagen würde. »Also weiter geht es nicht?« fragte sie, als Gregor sich wieder umdrehte, und stellte den Sessel ruhig in die Ecke zurück. (S.56)

この作品で、何か所か、この *einmal* という副詞で始まる箇所がある。あるいは、*eines Morgens* という副詞的 2 格の箇所もある。この「あるとき」とか「ある朝」は、それまで繰り返されていた日常が、不可逆の直線上へと時間が方向転換することを示している。そのもっともわかりやすい例は、メルヘンである。この副詞をきっかけにして、一度かぎりの出来事の連鎖が始まる。

この早朝、春を告げる雨が降るなか、3 人目の家政婦は、変態して成虫になっていたグレーゴルを、椅子を持ち上げて威嚇している。そのときグレーゴルは、身を翻して退却している。あれほど、体の向きを変えるのが困難だった変身当初とは違って、このときのグレーゴルは、振り上げられた椅子が自分の背中を直撃するのを恐れて、振り向いている。成虫になったグレーゴルは、幼虫のときと違って、かなり自由に動き回ることができたのである。

しかし、そのために、木の樹液を吸って生きるはずの甲虫は、蛆虫が食べるようなものは一切口にすることができない。そして、3 人の間借り人が入ってきたために、グレーゴルの部屋に荷物が投げ込まれ、グレーゴルは這い回ることができなくなり、そのうえ、掃除もされないまま放置された部屋で、埃まみれになってしまう。

それでもグレーゴルの、家族とくに妹に対する愛情は変わっていないが、3 人の間借り人の前でバイオリンの演奏をする妹を見るため、このこと部屋から出てきたグレーゴルは、間借り人たちにその恐ろしい姿を見られ、間借り人たちは部屋の賃貸契約を解除すると騒ぎ立てる。そこで、ついに、最愛の妹から、死刑宣告にも等しい「判決」が下されるのである。

Ich will vor diesem Untier nicht den Namen meines Bruders aussprechen, und sage daher bloß: wir müssen versuchen, es loszuwerden. Wir haben das Menschenmögliche versucht, es zu pflegen und zu dulden, ich glaube, es kann uns niemand den geringsten Vorwurf machen. (S.63f.)

もともと何一つ食べられなくなっていたザムザだから、その死は目前に迫っていたことだろう。江戸川乱歩に、人が死んだあとその肉体がど

のように変化していくかを描いた作品があるが、甲虫は、死んだあとも姿はほとんど変化しない。体全体を覆っている甲冑は、しばらくはそのままの状態である。

そしてある朝、3人目の家政婦は、この甲虫が死んでいることに気付くのである。最初は、生きているがただじっとしているものと勘違いしているところが、まさに甲虫になった主人公の姿を現している。

»Sehen Sie nur mal an, es ist krepirt, da liegt es, ganz und gar krepirt!« (S.68)

家政婦は、そう叫んで、グレーゴルの死を知らせる。そこでさらに気付くことは、それまで父親であり母親であった人物が、なんと「ザムザ夫妻」(S.68)と語られていることである。それまでは、基本的にはグレーゴルの視点で語られていたが、死んでしまった以上、もうグレーゴルの視点は存在しない。グレーゴルが生きているからこそ、彼らは父親であり母親であり、そして妹なのであるから、ザムザ夫妻やグレーテと語られるこれらの人物が、それぞれの固有の名前で生きていくためには、グレーゴルの死、より端的に言えば消滅が必要だったのである。

不安な夢から目覚めたとき、自分が巨大な甲虫の「幼虫」になっていることを発見したグレーゴルは、やがて変態して「成虫」になり、干からびて死んでしまうのだが、「成虫」になったとき、グレーゴルは眠れない一夜を過ごしている。そこでグレーゴルが何を考えたか、その分析はまた稿を改めて考察したい。

(了)

## 注

- 1) 筆者は、卒業論文も修士論文もフランツ・カフカで書き、最初に紀要論文として公開したものは、修士論文に手を入れたものだった。この修士論文に手を加えて公開したものが、筆者の最初の研究業績ということになる。拙論「フランツ・カフカ『アメリカ』——閉じない円環」『埼玉医科大学進学課程紀要』第一号(1980年6月)、35～55頁。

なお、この後、日本独文学会の文献データベース委員であったとき、文献データベース作成に微力を注いだが、そのささやかな成果として、この

データベースを用いて何ができるかについて、学会のシンポジウムでの発表を行った。

1996年10月20日「文献データベースの文学研究における利用」日本独文学会秋季研究発表会（於：大谷大学）シンポジウムⅦ：「日本独文学会文献情報と学会ホームページ——その構築・利用・将来」

そして、この学会での発表をもとに、日本におけるカフカ研究について私見を述べる機会を得た。

拙論「日本におけるカフカ研究についての一考察——日本独文学会文献情報（BGJ）を用いて」『成城文藝』157号（1997年1月）、130（1）～108（23）頁。

- 2) Vgl. Martin Walser: Beschreibung einer Form: Versuch über Kafka. München: Carl Hanser 1961.  
マルティン・ヴァルザー『カフカ？ ある形式の記述』（城山良彦・田ノ岡弘子・加藤忠男訳）サンリオ選書、1973年。
- 3) Franz Kafka: Die Verwandlung. Leipzig: Kurt Wolf 1915. なお、本書からの引用は、その頁のみを示す。
- 4) Franz Kafka: Metamorphosis and Other Stories. Translated by Willa and Edwin Muir. Penguin Books, 1961, p 9.
- 5) エドワード・ゴリー（柴田元幸訳）『蟲の神』河出書房新社、2014年。同『むしのほん』河出書房新社、2014年。
- 6) カフカには、Die Sorge des Hausvaters（家父の心配）という作品があるが、世界各地に離散したユダヤ人にとって、Hausvaterという存在はわれわれには想像できないほどの重みがある。